

力の源としての死後世界

—タイ国安南派仏教団（アンナムニカーイ）における心霊譚の活用

西田 昌之

本稿は、タイ国においてベトナム仏教を起源とする公認の大乗仏教宗派の一つである安南派（アンナムニカーイ）に注目し、同宗派が死後世界および靈魂に関する語り（心霊譚）をいかに宗派の権威形成と社会的関係の構築に活用してきたかを明らかにする。特に、追善供養儀礼であるゴンテック（功德）儀礼と、憑依・招魂儀礼をめぐる実践と語りを分析し、それらがタイ王室儀礼、政治権力、ベトナム移民との関係の中で果たしてきた役割を検討した。

はじめに

安南派仏教団（アンナムニカーイ）は、タイ国に2つ存在する公認大乗仏教教団の一つであり、ベトナム仏教を起源とする宗派である。18世紀後半以降、ベトナム仏教僧によってタイ領域¹内にもたらされ、現在ではタイ国内に23寺、海外に1寺を有する教団へと発展している [คณะสงฆ์อนัมนิกายแห่งประเทศไทย 2020]。本稿は、安南派が死後世界や靈魂との関係性を強調してきた点に注目し、そうした実践と語りが宗派の基盤としてどのように機能してきたのかを検討する。なお本研究は2022年の京都大学東南アジア地域研究研究所におけるタンヤーティップ・シーパナー博士の論文翻訳研究プロジェクトおよび2023年に実施された本科研費による現地調査と資料収集に基づく考察である。

タンヤーティップによる安南派の歴史をまとめると、次のようになる [タンヤーティップ 2022: 99–101]。安南派は19世紀後半、ラーマ四世およびラーマ五世の庇護の下で王室から正式に公認された。特にラーマ四世は皇太子モンクット王子であったときに剃髪して僧となっていたが、大乗仏教戒律への関心を通して、安南派僧と交流を深めた。王子がバンコクを視察している時に、慶雲寺の仏塔に目を止め、同寺が大乗仏教の寺であることを知った。そこで当時、その寺の僧であったオン・チャン・フン（Ong Trần Hưng）に大乗仏教戒律について下問した。これによって王子の知遇を得たフンは、王子の自由時間に大乗仏教についてわかりやすく教授することとなった²。それ以降ベトナム僧は王の御前に伺候する機会が与えられた。1851年に王子がラーマ四世として即位すると、フンを慶雲寺の住職に任じて、寺院修繕の支援を行った。

さらに次のラーマ五世は1899年に安南派を王室行事に参加可能な僧団として制度的に位置づけた。僧位階を整備し、僧位扇（ターラバット）を与え、御前に伺候すること、王の誕生日の祝いの儀式に僧が祝いを述べることなどを許した [タンヤーティップ 2022: 100]。これにより、安南派はタイにおける大乗仏教の代表宗派としての地位を確立することとなった。

1 本稿では、1939年シャムからタイへの国号変更以前についても便宜的にタイと呼称する。

2 オン・チャン・フン（1802–1885）は、ベトナムからタイに移住し、タイで得度したベトナム僧である。ラーマ四世の大乗仏教の師であり、慶雲寺（別名ワット・ウパイラートバムルン）の住職となる。ラーマ五世期に「プラクルーカナーナムサマナーチャーン」の僧位階が下賜され、初代安南派僧団長に就任した。

1. 死後世界を引き受ける安南派とゴンテック儀礼

安南派の最大の特徴の一つが、追善供養儀礼であるゴンテック儀礼の担い手としての役割である。ゴンテック儀礼は、死後の靈魂に徳を送り、極楽往生を助けることを目的とする大乘仏教儀礼であり、安南派と中国派によって実践されてきた。

19世紀後半以降、ゴンテック儀礼は王室葬儀に組み込まれ、国家的儀礼として制度化された。これにより安南派は、王室の死後供養を担う宗派としての象徴的役割を獲得し、死後世界と王権とを媒介する存在となった。ラーマ六世は崩御する前に遺言状を作っており、その中で遺言の五点目としてゴンテック儀礼への信仰を次のように記載している。

七日間の積徳のうちに、国王の遺体を礼拝する時でもよいし、プラメーン（火葬場）での儀式をするときでもよいし、ゴンテック儀礼を行ってほしい。もし私のために行ってくれる信者が誰もいなかったら、私の後継者に安南派か中国派の求道者を探し出して、私のために儀式を行ってほしい。[タンヤーティップ 2022: 115]

この遺言を受け、ラーマ七世は、ラーマ六世の葬儀において1925年1月14日に五十日法要（クロップパンヤーサマワーン）（50日目）、1925年3月5日に百日法要（クロップサッターマハ）（100日目）としてゴンテック儀礼を献じた[タンヤーティップ 2022: 115]。このことは安南派ゴンテック儀礼の王室儀礼への定着の過程として見ることができる。またタイの著名な民俗学者であるアヌマーンラーチャトンは、ゴンテック儀礼がタイの庶民の間にも普及し、新しい習俗を作り上げたことを述べている[พระยาอนันตราชัน 1993: 77]。

2. ギンテック儀礼と招魂の実践

ゴンテック儀礼とは、死去した家族・親類の靈魂を天国へと導くために、死後に現世から徳を送る儀礼である。ゴンとは功、テックは徳のことを指す。安南派と中国派の両派で行われる大乘仏教儀礼である。ゴンテック儀礼の始まりについて、安南派では次のような故事から説明している[เจ้าคณะใหญ่อนัมนิกายแห่งประเทศไทย 1994: 50]。昔、母殺しを行ったが、改悛して僧となった者がいた。その者はその後善行を積み、多くの弟子を持つ高僧となったが、死後、母殺しの咎で阿鼻地獄（無間地獄の一つ）へ落ちた。ある日、弟子の一人が瞑想中に地獄で苦しむ師の姿を見た。そこで弟子たちが償いのために追善供養を行うと、その甲斐があつて忉利天に往生したという。

ゴンテック儀礼の一例について概要を述べる。ゴンテック儀礼はまずは6つの壇を設ける。1) 仏の壇、2) 法の壇、3) 僧伽の壇、4) 南瞻部洲諸神・天人の壇、5) マーライ尊者³の壇、6) 閻魔王の壇である。さらに周囲に観音の像を配置し、5名以上の僧で行う。ゴンテック儀礼は以下の14の段階から成り立っている。呼び出した靈魂とともに疑似的にあの世とこの世を往還し、また仏に諸神や供物をささげ、許しを請う儀礼である。かつては5日5晩行われたが、現在は、1日で終わることが多いという。ベトナム僧はこの冥界めぐりと招魂の技術に長けているとされる。

1. 仏の招請（正しい位置に仏、観音、諸神を招く）
2. 物故者の招魂（経を唱えて、位牌や氏名の書いた紙に招魂する）
3. 死者の靈への清めの水かけ
4. 過橋（子孫が、冥界へと架かる模造の橋を渡り、故人の靈魂がかつて現世に渡る際に輪廻の中で作った債務を橋のたもとの盥に小銭を入れて支払う）
5. 破地獄（模造した地獄の門を破り、地獄の衆生に経と徳を届け、靈魂を救い出す）
6. 鐘突きと散華（鐘の周囲を巡りながら、三度鐘を突き、靈魂の形代に僧が散華をする）

3 マーライ尊者は、タイの葬式の際に誦経されることがある『プラ・マーライ経』に登場する法力僧である。また『プラ・マーライ経』はスリランカから北タイ、アユッタヤと南伝で伝わった上座部仏教経典である。マーライ尊者は、地獄に下っては法力によって亡者を救い、また一転、天界三十三天に昇ってはチュラーマニー仏塔で弥勒菩薩に邂逅し、未来における弥勒降臨に向けて功德を積むようにと、現世の人々に教え諭したことで知られる。このことから、ゴンテック儀礼において上座部仏教が混交していることが読み取れる。

7. 旗立て（三界の諸神のために旗を立てる）
8. グンゴ（供盒？ 諸仏に供物を進ずる）
9. 斎僧（僧に供物を進ずる）
10. 放水燈（紙製の花の形をした灯籠 36 基に花、線香、36 サターンの銭を入れて池や運河に流す。）
11. 死者への供え（物故者の靈魂に供物（紙で作った日常品など）を供える）
12. 施孤（供え物を貧しい人々へ無償で配る）
13. 招魂し、罪の許しを請う（諸仏に経を上げて物故者の靈魂のために許しを請い、紙で作った供物を燃やして、冥界へと送る）
14. 供仏（儀式に招いた諸仏、諸神を元の場所へ送る）

[เจ้าคณะใหญ่หน้ภูมิภาคแห่งประเทศไทย 1994: 12-15]

以上、ゴンテック儀礼は招魂、破地獄、過橋、放水燈など 14 の段階から構成される複雑な儀礼体系を持つ。例えば過橋においては、安南派僧は疑似的に親族を冥界に連れていき、死者の生まれ変わりのために功德を積むことができように取りなしを行う。死者の魂を降ろした旗とともに冥界に架かる橋のたもとで銭を払っていくものである。安南派が伝える『受生経』（玄奘三蔵が西域で見つけた經典とされる）によると、人は生まれてくる際に現世に至るために仏に借金（受生銭）を負ってきているという。新たな良い生を受けるためには、その借金を支払っていく必要がある。そこでゴンテック儀礼では、現世の親族が僧の導きによってあの世への橋を越え、故人が新たな借金ができるように返済に向かうのだという [เจ้าคณะใหญ่หน้ภูมิภาคแห่งประเทศไทย 1994: 50]。このように儀礼において安南派僧は、死者の靈魂とともに象徴的に冥界を往還し、徳を冥界へと送る能力を持つ存在として位置づけられる。特にこの憑依や招魂といった実践は、僧が死後世界と直接交渉可能であることを示す重要な要素であり、安南派の宗教的権威の核心をなしている。

3. バーオウン師による死霊との対話

20 世紀中葉に活躍したバーオウン師は、まさにこの招魂儀礼と憑依実践によって安南派の霊的能力を象徴する存在であった。師は、ラーマ九世の行幸に際して宗教儀礼を執り行うなど、王室との関係を通じて宗派的威信を高めた [ตันยาร์ทิพย์ 2022: 112]。

特に知られている師の事績とすると、景福寺の布薩堂の中にあるボーロムクルペート・チーウォックゴーマーラパットの招霊と神像の鑄造がある。仏陀の薬師とされるチーウォックゴーマーラパット像の建立の逸話は、景福寺においてよく語られているものである。現在も尚、病を治す霊験あらたかな像として信仰を集めているが、この像は、師が 1954 年 3 月 18 日招魂儀礼を行った際に、信徒のタウィー・ヂャムルーンヂャン警察少佐の体に憑依した妻の靈魂の言葉がきっかけとなり、鑄造することとなった像である [องสรภามมธุรส (บัวเอ็ง) 1959: 16]。師は、自らの親指にチーウォックゴーマーラパットを招霊して、尊顔を映し、仏師にそれを彫らせたと言われている。こういった心霊譚は彼自身のカリスマ性を強化すると同時に、安南派教団の聖性を可視化する資源として機能した。

4. 死後世界の力と政治

靈魂との交渉能力は、宗教的領域にとどまらず政治的領域においても重要な意味を持った。プレーク・ピブーンソンクラーム政権期には反共政策の中でベトナム系住民が監視対象となる一方で、バーオウン師は例外的に保護された。さらにサリット・タナラット政権下では憑依儀礼が禁止される中で、噂ではあるが、安南派の憑依実践は「本物」として容認されたと語られている [The Real Ghosts 2020]。このように心霊譚は、政治権力との関係の中で安南派の正統性を支える重要な装置として機能していた。

一方で、ベトナム戦争の激化に伴い、タイ政府は親米政策を強め、共産主義勢力を支援していると目される寺院周辺集落のベトナム人を監視対象とするようになっていった [ตันยาร์ทิพย์ 2022: 130; มนธิรา 2013]。ベトナム集落の住民たちは、生活しづらさのために集落を出てゆき、また一部はバンコク郊外や地方、ベトナム

ムに離散していった。しかし、安南派はすでに多くをタイ人、中国系タイ人の僧が占めていたために、ベトナム出身僧を移入しなくても、宗派の維持は可能であった。このような流れの中で、バンコクでは安南派寺院は維持されたものの、多くのベトナム集落は、タイ政府のベトナム戦争への関与の中で消えてゆくこととなった。

5. 方便としてのオカルト

今日においても、安南派はタイを拠点とする大乘仏教宗派として、また死後世界とかかわりの深さという異質性において異彩を放っている。安南派は死後世界や霊魂に関する語りを、信者獲得のための方便として活用している。テレビ番組やメディアを通じて語られる心霊譚は、いわゆるスピリチュアルな志向を持つ人々を惹きつけ、安南派の教えに関心を向けさせる導入口となっている。

すでに多くの安南派の高僧たちが霊との対話を強調しているせいか、安南派僧は特に心霊譚を語ることに躊躇はない。むしろ仏法の力を語るための方便として用いているようにも見える。僧の葬式本（タイの伝統として死後に作られる文集）の中にも、霊を見た話が載っているものがある。例えば、カーンチャナブリー県興福寺のプラソムプット・ミンラップ師の葬式本にも、いくつかの心霊譚が掲載されている。

1983 年の森林行（トゥドン）：カーンチャナブリー県シーサワット郡プラントム洞窟

三日目の夜、深夜 12 時過ぎにうとうとしている時に、ふと通路の奥に目をやると、尼の霊が見えた。立って何かを読経しているが、よくわからない。私の方では持っていた数珠から声が聞こえて来て、瞑想をさせておいてほしいとのことであった。私も右手で仏壇を触れ、優しく祈った。彼女がものを入れている皿がまわる音がして、私は完全に目覚めたが、彼女の姿はもはやなかった。私は座り、その尼の霊に功德を届けるために 15 分ほど読経を行った。[วัดเจริญบุญไพศาล 2022]

このように現在もなお、安南派の心霊譚において、死後の霊の存在と追善供養による法力の霊験は、安南派の世界観を生み出す物語生成装置として機能している。小さな物語ではあるが、大乘仏教宗派である安南派の持つ世界観を示している。死後の彷徨える霊の存在、追善供養、そして霊の成仏という心霊譚のプロットは、そのまま安南派の信仰を支える基盤となっているのである。

おわりに

安南派仏教団は、王室儀礼を担う中で死後世界との結び付きを制度化し、霊魂との交渉能力を宗派の中核的資源としてきた。バーオウン師に代表される心霊譚は、その宗教的・社会的影響力を可視化する装置であり、政治権力や社会変動の中で安南派の存続を支える重要な役割を果たしてきた。また今日においても、オカルト的要素を含む死後世界の語りは、安南派の宗教的魅力を支える基盤であり続けている。

参考文献

タイ語

คณะสงฆ์อนัมนิกายแห่งประเทศไทย. 2020. คณะสงฆ์อนัมนิกายแห่งประเทศไทย [タイ国安南派僧伽]. <https://www.anamnikayathai.com/> (2024 年 2 月 18 日閲覧)

เจ้าคณะใหญ่อนัมนิกายแห่งประเทศไทย. 1994. อนุสรณ์งานพระราชทานเพลิงศพ พระคณานัมธรรมสมาธิวัตร (ข้ากหมิงมหาเถระ) เจ้าอาวาสวัดมณฑลสมาคม คณะใหญ่อนัมนิกายกิตติมศักดิ์ ณ เมรุวัดสมณานัมบริหาร กรุงเทพมหานคร [วัตต์・มอนคอนซัมเมอร์คอม住職およびタイ国安南派僧団長 プラカーナムタムマサマーティวัตต์師（ヤークムーンマハーテラ）のバンコク都วัตต์・サマナーナムボーリハーンでの火葬記念]. กรุงเทพมหานคร: ประชาชน.

พระยาอนุমানราชธน [เสถียรโกเศศ]. 1993. ประเพณีเนื่องในการตาย [死にまつわる伝統慣習]. กรุงเทพฯ: ศยาม

- มนธิรา ราโท. 2013. ไทยในการรับรู้และความเข้าใจของเวียดนาม [ベトナム人の認識と理解におけるタイ]
 ไทยในสายตาเพื่อนบ้าน [近隣諸国から見たタイ], pp. 261-313. กรุงเทพฯ: ศูนย์เชี่ยวชาญเฉพาะทางด้านแม่โขงศึกษา
 สถาบันเอเชียศึกษา จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย.
- วัดเจริญบุญไพศาล. 2022. ประวัติพระสมุณ มินห์ลับ จาวตระกูล [プラソムพุต・มินลัก・จารย์อุตราเถน師の経
 歴]. กาญจนบุรี: วัดเจริญบุญไพศาล
- องสรภานมรุส (บัวเอ็ง). 1959. บันทึกปฐมเหตุที่ได้พบและการปั้นหล่อรูปบรมครูแพทย์ชีวกโกมารภัฏ [โบ-
 คุมกุลเปต・ชีวอ็อกโกมาราพัตの顕現と像鑄造の起源に関する記録]. กตัญญูตานุสรณ์
 ชิวประวัติบรมครูแพทย์ชีวกโกมารภัฏ [報恩記念 โบ-คุมกุลเปต・ชีวอ็อกโกมาราพัตの伝記],
 pp. 16-24. พระนคร : คณะสงฆ์อนัมนิกายธรรมเดวาสสิก.
- The Real Ghosts. 2020. ตำนานทรงเจ้า วัดถวณสะพานขาว EP.75 ช่องส่องผี [降霊伝説 サパンカーオのベトナム寺院
 EP.75 幽霊目視チャンネル]. <https://www.youtube.com/watch?v=OltkpeX3SmE> (2024 年 2 月 21 日閲覧)

日本語

- ตันยาร์เทียัพ・ชีพานะ. 2022. 「ベトナム人と安南派仏教（アンナムニカーイ）の来泰、およびラッタ
 นาโคชิน王朝初期におけるワット・サมานาナムบอริฮานะの建立」西田昌之（訳）. 『日 ASEAN 超学
 際研究プロジェクトワーキングペーパー』No. 13. 京都：京都大学東南アジア地域研究研究所.